資料６

鴨川府民会議メンバーからの意見発表

事前に資料を提出いただいた方

（敬称略、五十音順）

飯塚　隆藤

高橋　恭弘

野口　義晃

松井　恒夫

村島　哲郎

意見発表様式

氏　名	飯塚　隆藤
テーマ	①鴨川・高野川に架かる橋について―七条大橋 100 周年を中心に― ②鴨川・高野川に関わる情報の地図化・可視化について―鴨川マップ構想―
意　見	①現在、鴨川・高野川には大小様々な橋が存在するが、それらはいずれも大正時代以降に架けられたものである（右図参照）。大正期以前にも橋は存在したものの、明治末期から開始された京都市三大事業に伴う道路拡張や市電の敷設によって、新しく架け替えられた。しかしながら、その多くは 1935（昭和 10）年の鴨川大洪水で流失したことはよく知られている。そうしたなかで七条大橋は幸いにも流失を免れ、2013（平成 25）年 4 月 14 日に 100 周年を迎えている。近年、七条大橋は京都市の近代化遺産として認識されているが、2008（平成 20）年には土木学会選奨の土木遺産に認定されている。 　千年の都と称される京都の長い歴史のなかで、近代という短い期間であるが、近代の建築技術・意匠をこらした橋の歴史、橋が結ぶ地域の歴史など、今後、文化的景観の観点からの河川環境の整備や保全が必要であると考えている。これまでの府民会議においても、鴨川ギャラリーの設置場所や内容に関する議論がなされてきたが、橋そのものに着目されてこなかった。鴨川府民会議として、橋についても再認識し、鴨川の魅力の一つとしてアピールしてほしい。 ②第 3 期の公募にあたり、私自身が取り組んでみたいテーマとして、「GIS（地理情報システム）を用いて、鴨川マップを作る」ことを挙げさせていただいた。平成 24 年度から鴨川府民会議に出席するなかで、最も強く感じたことは、「議事内容の豊富さ」である。野鳥の生育環境の保全やトビ被害、ヌートリアの増殖などの生態系に関わる問題、家庭ゴミや産業廃棄物の投棄などの環境問題、バーベキューや花火、原付バイク、サイクリング、ライブパフォーマンスなどの空間利用、中洲除去や護岸・園路・堤防の建設などの河川環境整備など、豊富な議事内容に対してあらゆる観点からの議論が必要であり、それぞれに対して常に「どこでどのようなことが行われている（起こっているのか）」を地図上で把握する必要があった。議事の配布資料には、各々の詳細地図が掲載されていたため、比較的容易に議事内容に入ることができたが、複雑かつ膨大な内容を把握するのは、当事者（河川管理者）といえども難しいように感じた。 　今後、鴨川の新しいプランをはじめ、新たな河川環境整備や保全が実施されるなかで、各々の取り組みや利用のルール、多種多様な問題などを集約し、それらを広く情報開示していくことが、鴨川をより良くしていくことにつながるものと考えている。その手段の 1 つとして、子どもから大人までわかるような「鴨川マップ」の作成（地図化・可視化）を提案したい。

資料６

意見発表様式

氏　名	髙　橋　恭　弘
テーマ	1：鴨川があるべき姿についての考え方の構築について 2：鴨川の特徴的資質と抱えている重要な問題について

はじめに、鴨川府民会議に参加し、行政や多くのメンバーの意見を聞き、日々の暮らしの中で鴨川に対する見方が随分と変化し、感慨深いものになりました。そして多角的に気になることが多くなり、それを自分なりに整理・課題化すると、「京都府鴨川条例」「整備計画」「鴨川府民会議」「鴨川流域懇談会」などを基に30年後を見据えなければと感じています。

1：のテーマについて

鴨川を利用する人々が今後30年でどのように変化するのでしょうか、2045年の人口は、全国では1985年のレベル1億1千万人を下回ると予測されています。その構成を見ると1985年との比較では30年後は14歳以下1，202万人・▲54%に15～64歳6，099万人▲17%に、65歳以上は3，633万人338%増実に3倍以上の人口になります。
この人口構成予測、直近の経済成長率は1968年の12，4%から昨年の1%台への予測、都市空間成熟（古都への原点回帰の方向）の方向予測などが見える中、30年後の人々が京都に何を求めるのか、そしてどの様な姿であるべきなのか、さらに後世に伝えるものは何かを多角的視点で（縦割り行政ではなく）総合的に考えられなければならないと思います。
では多角的視点の一例としては、治水×景観×水質×環境×空間×癒し×古都×自然等もっとあると思いますが、仮に、京都に鴨川が無かったとしたら、京都の魅力は他の歴史的資産を持つ都市とどう違ったでしょう、鴨川の存在価値観がさらに見えてくると思います。
ここで、①「30年後の鴨川と人との良好な関係はどうあるべきか」多角的認識が必要であり、②「30年以上の将来を鑑みた維持管理・開発が必要」となります。直近対応も大事ですが30年50年先に何を伝えるか、どの様な姿を望まれているのか、を慎重に考える事が重要。

2：のテーマについて

今まで会議で話し合われてきた多くの課題、災害治水、景観保全、自然破壊、生態系破壊上流域森林保全、上流域の産業廃棄物工場、迷惑行為、イベントのあり方、開発の方向性等、様々な問題が有りますが、鴨川を大事にし、大事に考え行政の方々と府民が取り組まなければならない重要な問題は、「上流域の環境改善」だと思います。
どの様な問題にも共通しますが、全ては根源にあります。 府民や来京者や行政の人々も皆鴨川を大事に思い、様々な取り組みをされていますが、その取り組みは鴨川を美しく維持したいとの思いの以外にはありません。 この美しくしようとする事も、鴨川の源流が美しくなければ、全くと言ってよいほど美しい鴨川を求める努力が虚しい努力になっているのではないでしょうか。
中州や寄洲の除去をされると、異臭がするし、ヘドロも出てくる。河床の石にはヘドロがこびり付いている。最近の新聞記事に川にかかる飛び石の記事が有ったが、飛び石を渡るときに下を見る河床の石にこびり付いたヘドロが見えます。こんな状況では美しい鴨川とは言えないのではないでしょうか。 日本の3大清流と比較しては都市人工河川としての鴨川が可哀そうで、維持管理に日々努力されている行政の方々も異論はおありでしょうが、河川を形成している根源の環境を再度注視し、美しい鴨川を維持管理し、後世に自慢できる行政成果にして頂きたいと思います。
京都府の北部地質調査資料では、鴨川上流域は砂地でドロが出る事は無いと解っています。
古都京都を流れる鴨川が、山紫水明の景観を作る大きな役目を果たしています。これからも、パリのセーヌ川がセーヌであり、ドイツのライン川がラインで有るように、京都の鴨川はいつまでも鴨川で有るよと言われるように、自然豊かで河床の石が水流にキラキラ輝き手にすくって見たい京の景観を作る川であってほしいと思います。
③「鴨川上流域、産業廃棄物処理施設問題」、以上①②③を意見発表から抽出され課題として、意見と共に課題提案をさてて頂きたいと思います。

氏名	野口　義晃
テーマ	なからぎの道しだれ桜
意見	１９６５年京都鴨川ライオンズクラブは鴨川緑化推進事業として植物園西の土手に５本の紅しだれ桜を植樹しました。これを機に鴨川整備事業の進展とともに逐次植樹を行い、１９７７年４月に蜷川知事命名の「なからぎの道」が誕生しました。その後も引き続き、植樹、補植を実施し、現在なからぎの道（約 800m）には７４本の紅しだれ桜が植栽されています。 現在は京都府民をはじめ、世界の観光客にも認められる桜の回廊となり、大きな観光スポットになっています。５年前には JR 東海の「そうだ京都へ行こう」のキャンペーンポスターとして全国的に名を広め、最近ではしだれ桜の開花期間の２週間で毎年 65,000 人以上の人がおとずれるようになりました。 しだれ桜並木の維持管理に対して振り返りますと、この４０年間で立ち枯れや衰退木２５本を当クラブにより補植しています。夏場における水不足を解消するため、2003 年に自動潅水設備を設置し、毎年４月から１０月までの７ヶ月間稼働させています。この結果後枯れ死する木はなくなりましたが、植物園正面玄関西から北大路までの約２０本の生育状況が依然として悪いため、２００９年に原因究明のためこの区間４カ所の土壌調査を行いました。この区間は戦後まもなく米軍の手で緊急につくられた堤防であるため、コンクリート片やレンガなどの瓦礫で埋められ、保水性に乏しく樹木の根の健全な成長に適さない土壌であることが判明しました。このため、2010 年 2 月１カ所の土壌改良工事を試験実施し経過を観察した結果、発育状況は大幅に改善されました。これにより京都府へこの区間の土壌改良を申し入れ、毎年段階的に改良工事を実施していただくことになり、現在５カ所の工事を終えています。 また、従来より対症療法的に実施していた除草、除虫などの維持管理作業を２００９年より、年間の維持管理計画を策定しこれに基づき除草（桜植栽帯）、施肥、害虫駆除、剪定、潅水設備の点検保守を年間を通じて計画的に実施しています。 [今後の課題] ① 植物園玄関より以南の土壌改良工事は道半ばであり、早急に完工していただきたくようお願いいたします。当クラブとしては、維持管理費用の捻出に精一杯で、力の及ばないところです。 ② しだれ桜の維持管理費用は 30 千円～40 千円/本ですが、桜の成長と共に、棚の新設なども必要となり、整備についても費用が増加していくものと思われます。

	③ 現在までのわがクラブの活動に対して昨年緑綬褒状を拝受し、メンバー一同のなからぎの道に対する士気は高まりましたが、昨今の厳しい経済環境の下、維持管理資金を将来にわたって安定的に確保するのははなはだ難しい状況です。 ④ 当クラブとしては、資金確保のため、イベント時の寄付活動、一般からのサポーターの募集などについて検討を進めるほか、「なからぎの道保存会」の設置等について京都府と協議し、なからぎの道の発展存続を機能的に進めるための方策を講じていきたいと考えています。

氏名	松井　恒夫
テーマ	①　さらに安心で安全な、憩いの場所としての鴨川に。 ②　エリア設定をした上での、的を絞った働きかけを。
意見	●　治水を第一に安心、安全な府民憩いの場として、より自然の状態を保ちながら、維持・改修して行く。 　最近の異常気象にも、すぐ対応出来る体制を強化し、災害の被害を最小限に抑える思考、努力を怠らないようにする。治水事業、避難方法、対策が即時行動に移せるように、誰が何をしなければいけないかを周知徹底しておく。 　河川課、土木事務所、自治会、ボランティア等、各種関係機関が絶えず連絡出来る体制にしておく。 ●　上流、中流、下流という分け方だけで無く、もう少し細分化されたエリア・ゾーンに分け、それぞれの特徴を生かしたビジョンを構築する。 　治水重点の地区、自然環境を守り育てる地区、特に景観を大切にする地区、公園としての機能を持つ地区等々に、鴨川流域全体をもっと細かく分け、上流域は、源流の志明院を中心とした自然や環境教育に関して、さらに精神的なエリアとして、改修を加えながら、本来の川（水）の在り方を考える地域に。中、下流においても〇〇橋～〇〇橋の間は〇〇ゾーン、又、△△橋～△△橋の間は△△ゾーンとして整備し、過去・現在・未来へと続く全体として鴨川を捉え、調和を持った多目的河川として整備を図る。 ●　歴史都市・京都の中心として、哲学的な思考を行えるような場所、歩きながら思考に耽る事の出来る河川として、川（水）本体、河川敷、橋、景観の調和を十分に配慮して、残すべきものは残し、守るべきものは守りながら、１２００年以上の蓄積された時間を将来も継続できる様に計画を推進する。 　京都は学生数が多く、大切な青春の４年間を過ごす「まち」の思い出の一つとして、「鴨川」がなれば良いと思われる。

	●　河川敷への観光客への誘導は重要視しなくても、河川近隣に多種多様にある歴史的文化財や街並みで十分であり　、府民憩いの場としての機能を重点として考えればよいと思われる。 （それは、河川敷が滞留する場所ではなく、南北、東西への動線としても活用され、人々（観光客）を流動させる事によって、地域を活性化させ、経済的な効果を生みだせるものとしてとらえ、それ自身は、名所ではあるけれども「道」という感覚でよいと考える。） 川には魚が泳ぎ（オオサンショウウオ等の希少生物を守り）、野鳥が訪れ、それを見ながら散策する子供や若者、高齢者の方々が安心して歩ける河川敷、１２００年以上も長く続いて来た景観を守る事の難しさを心に置きながら、将来の子供達につなげて行く役割は非常に重要な責務だと思われる。 以上

《意見発表》

氏名	村　島　哲　郎
テーマ	（１）加茂川上流域の環境保全と有効活用の為の整備と開発について （２）加茂川（鴨川）流域施設との協働と各ﾌｨｰﾙﾄﾞｾﾝﾀｰの設立 （３）鴨川の歴史と並行した関連催事との連携
意見	（１）について 鴨川（加茂川）の中・下流域は既に整備が進み、市民の憩いの場としての環境もかなり整ってきた。 一方柊野堰堤からの上流域は開発が進んでいない分、多くの自然が残されており水質保全や生き物の生態系維持には重要な役割を担っていると言える。反面この地域は市内からも近く、年間を通して自然を生かした野外活動の場としても充分活用できる環境なのでもある。 （１）―①環境保全 現状の上流域環境保全に関しては無防備な状況に近いと思われる。 特に春から夏に掛けてはﾊﾞｰﾍﾞｷｭｰや川遊び等によるごみ投棄も多数見受けられ、また雲ｹ畑までの道程には途中産廃処理・保管施設等が有り、そこから不純物質等が加茂川に流れ出る可能性は否定できない。 それと両岸の山には杉の倒木も多数見受けられる。 今の状況を放置すれば水質や生態系、更に下流での水害等での悪影響を及ぼし、環境の破壊は火を見るより明らかである。 環境保護の観点から早期にこの一帯を規制する条例を設け、自然環境溢れる地域に育てて行く必要が有ると考えます。 （１）―②開発と整備 上流域での野外活動人口は年々増加傾向にあり、このまま放置すれば上記の通りごみ投棄量は増えるばかりである。 しかしながら健全な野外活動は府民にとっても必要な事である。 その為にも気軽に利用できる野外活動施設等の設置が必要と考える。 自然保護と開発は相反する行為では有るが、現状の自然を護って行く為にも、その運営ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝをしっかり整備する事によって、今の無防備な状況から、今後はｺﾝﾄﾛｰﾙされた野外活動の場として活用して行けるのでは無いだろうか。 （２）について 加茂川と府立植物園は半木の道を挟んで隣接しているが、境界のﾌｪﾝｽによって分断されてしまっている。 管理上色々な問題も有ると思いますが、折角隣接した好条件なのだから、加茂川と植物園が融合した公園とし、更に将来的には府立大学・総合資料館・陶板名画の庭・ｺﾝｻｰﾄﾎｰﾙを含む北山地域一帯を広大な『学術研究・文化自然公園』へと発展させては如何なものでしょうか？ これと並行して上・中・下の各流域に密着したﾌｨｰﾙﾄﾞｾﾝﾀｰ（拠点）を設け

意見	ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動、学習・文化・歴史活動、自然保護活動（水質・生態系・景観）、治水研究活動等の拠点として市民の意識高揚と観光へのｱﾋﾟｰﾙの場として活用する。 （３）について 京都には三大祭りに代表される歴史的にも重要な催事が多くある。 中でも葵祭りは加茂川に隣接する上賀茂・下鴨両神社の祭りであり、『加茂川』の名もこの一帯で勢力を誇っていた加茂一族から由来する程の密接な関係がある。 また上流域の雲が畑で毎年夏に行われている『松上げ』行事は、大文字に代表される五山送り火の発祥当時から、伝統行事として受け継がれている。 この様な祭事と組み合わせ鴨川の魅力発信（PR）の為、全国に数十社有ると言われている賀茂神社が集まった『賀茂神社サミット』の開催や、近隣の花背や広河原に伝わる松上げを初め、全国各地の送り火が催されている自治体が集まった『全国送り火ｻﾐｯﾄ』等を本会議から提案し、各祭事の関連事業として育てて行くのも良いのではないだろうか。